

東洋医学の国際化は鍼灸から

これまで何度かにわたり、米国の東洋医学を実質的に支えているのは鍼灸に関わる人々であることをお伝えした。そこで鍼灸がどのようにして米国に伝わってきたか、そして今どのような状況にあるかを、3回に分けてご紹介することにしたい。

筆者は鍼灸については門外漢であるが、それでも思い切ってこのテーマを取り上げることにしたのは、鍼灸が国際化してゆく様子が極めて印象的で、漢方の国際化を考える上でとても参考になると思うからである。また鍼灸史を調べていると思いがけない事実を随所で再発見し、非常に興味深い。それもぜひご紹介したい。

さて、鍼灸を米国にもたらしたのは誰だろうか。70年代にニクソン大統領が訪中したときに鍼麻酔と衝撃的な出会いをし、それから米国に広まったという説がある。中国からの移民がもたらしたに違いない、と考える人もいよう。しかし、実はヨーロッパからの影響も無視できないほど大きく、それが現在の米国鍼灸に日本と異なった側面を付け加えている。ゆえに回り道のようなようではあるが、まずは鍼灸の起源とヨーロッパへの伝播から説き起こさせて頂きたい。

鍼灸の起源

最も古い鍼灸の事例は、南アルプスの山中で発見されたミイラ、オッツィであろう。このミイラは氷河の中に閉じ込められていたため奇跡的に保存状態が良く、年代測定の結果 5,300 年前という非常に古いものであることがわかった。彼の体には 50 箇所以上の入れ墨の痕があり、その解釈が論議を呼んだ。やがてこれが鍼灸の経穴に非常に良く合致していることが判明し、病理診断の結果と照合して、彼は関節炎の鍼灸治療を受けていたのではないかとされている。

それから千数百年下った古代エジプトの時代にも鍼灸の記録がある。紀元前 16 世紀に書かれたエジプトのエーベルス・パピルスは現存する最古の医学の記述とされているが、これには体にめぐらされた管の経路が描かれている。それが血管系やリンパ系などよりむしろ鍼灸の経絡に酷似しているという。

中国の鍼灸はご承知のようにそれと同じ頃からの経験が蓄積され体系化されたものであるが、中国鍼灸医学の原典である『黄帝内経靈樞』が実際に書かれたのはこれからさらに千年以上下った紀元前 1・2 世紀のことである。

中国医学と同様に数千年の歴史を持つと伝えられるインドのアユルベーダにおいても、体に何千とあるマーマと呼ばれるポイントに鍼を用いて刺激を与える治療法がある。これはスチ・カーマまたはマーマパンクチャーと呼ばれている。

このように鍼灸はどうも中国で生まれて徐々に世界各地に伝播したものではなく、世界のあちこちで独立して発生したものらしい。南アフリカのバンツ一族には体の特定の部分を引っ搔いて治療を試みる風習があり、エスキモーも尖った石を用いて鍼灸に似た行為を行い、ブラジルにも小さな吹き矢を使って特定のつぼを刺激する治療を行う部族があるという。これらも鍼灸が各地に独立して芽生えたことの

傍証のようである。

こう見てくると、鍼灸はかなり普遍性が高く、もともとグローバルな素地のある医療技術であることが理解できよう。現在では中国がひとり鍼灸を生み出した国という荣誉に浴しているが、それは中国のみが鍼灸技術を体系化し、かつ医書に著して伝承したからであろう。

鍼灸と漢方の違い

少し脇道にそれるが、ここで鍼灸と生薬療法との違いを一つ指摘しておきたい。漢方などの生薬療法は、薬草という土着性の高いものに依拠して初めて成立する技術である。従ってその内容は地域ごとにそれぞれ独特なものとならざるをえず、ヨーロッパにはヨーロッパの、インドにはインドの、各地に応じた生薬療法が生まれ、互いに共通性は少ない。すなわち生薬療法は本質的にローカルな性質を内包しており、鍼灸と対照的である。

鍼灸や漢方を異国の地で行うには、鍼や灸や生薬が手元に無ければならない。異国で鍼灸を実践するために必要な鍼や灸の供給を確保するのと、漢方療法を行えるだけの生薬供給を確保するのとでは、その困難さが格段に違うことは容易に理解できよう。

従って、これから見てゆくとおり、鍼灸が生薬療法に先んじて世界に広がることになる。近代的なエキス製剤ができて生薬療法を世界に広げる上での物質的な障壁が低くなったのは、ごく最近のことである。

灸がまずヨーロッパへ伝播

さて、アジアの鍼灸がヨーロッパに実質的に伝わりだしたのは、ヨーロッパがアジアとの貿易と植民地化を目指し、商人や宣教師を活発に送り込むようになった 16 世紀後半からであった。当時中国はヨーロッパとの交易を嫌いイエズス会の宣教師しか受け入れなかったため、相対的に日本など周辺国からの情報がヨーロッパで重要視された。こうして日本が鍼灸の世界史の中で意外に印象深い役割を果たすことになる。

鍼よりも先に、日本で行われていた灸がヨーロッパに詳細に伝えられた。16 世紀末、日本に来たポルトガルの神父ロレンソ・メヒカが、日本で見聞した「薬草で作った火のボタン」について本国への手紙で報告している（表 1）。

表 1 ヨーロッパと鍼灸 関連年表

1543	ポルトガル人が種子島に漂着、鉄砲を伝える
1549	スペインの宣教師ザビエルが来日
1584	ロレンソ・メヒカが灸についてスペインに報告
1602	オランダが東インド会社を設立
1619	オランダがジャワのスンダ・カラパを占領、バタビアと改名
1634	長崎に出島できる

より本格的に灸を紹介したのは、オランダのアジア根拠地であったバタビア（現在のインドネシア・ジャカルタ）に赴任したオランダ人牧師ヘルマン・ブショフであった。彼は現地地で体験した灸の効果に感動し、灸による痛風の治療効果を小冊子にまとめた。彼の死後それがヨーロッパで出版され、大いに注目を集めた。ブショフがモグサ（moxa）という言葉を使ったため、moxa はヨーロッパ中の言葉に定着し、灸が moxibustion と呼ばれるようになったという。

鍼のヨーロッパへの伝播

アジアの鍼についての最初の記述は、やはりバタビアに赴任したオランダ人医師ヤコブ・デ・ボントによる。彼は帰国後東インドの自然と医術の歴史に関する6巻の大著を書き、その中で鍼灸についても報告した。

17世紀後半になると、イエズス会のボイトやハービールが本場中国で見聞した鍼灸について本を書いた。しかし日本経由の情報のほうが質量ともに豊かで、ヨーロッパに強い印象を与えた。すなわち、長崎の出島を訪れたオランダ東インド会社の人々が、日本で見た鍼灸について次々にヨーロッパに報告したのである。

その最初の1人はオランダ人医師ウィレム・テン・ライネであった。次にオランダ商館長を務めたドイツ人医師・植物学者のアンドリース・クレイエルが続き、さらに博学の日本紹介者として名高いオランダ商館付のドイツ人医師、エンゲルベルト・ケンペルが続いた。

彼らは学問の素養もあり非常に優秀な人々であったらしく、ヨーロッパの医学を日本に伝えたばかりでなく、食欲に日本の情報を収集した。そしてそれぞれ表2に示したような貴重な著作を残し、鍼灸や植物を含む日本の風物を詳細にヨーロッパに伝えた。

表2 ヨーロッパと鍼灸 関連年表

1639	外国貿易をオランダと中国に限る ジャガタラお春ら混血児バタビアへ追放
1658	ヤコブ・デ・ボント『東インドの自然と医術の歴史』を著す
1671	ハービール『中国医学の秘密』を著す
1675	ヘルマン・ブショフの灸に関する小冊子が出版される
1682	アンドリース・クレイエル『中国医学軌範』を著す
1683	ウィレム・テン・ライネ『関節炎論』を著す
1694	エンゲルベルト・ケンペル『10の異国見聞』を報告
1758	ローレンツ・ヒシュター『外科』の中で鍼灸を推奨
1810	ルイ=ジョセフ・ベルリオーズがパリ医学校で鍼灸の実演を行う
1820	オテル・デュ慈善病院において鍼灸教育を実施

鍼を表す *acupuncture* という英語は、ライネが名づけケンペルが広めた *acupunctura* に基づいているという。ただし残念ながら言葉と医学概念の違いが障壁となり、ライネやケンペルの鍼灸理解は正確なものでなかった。したがって彼らの紹介する日本経由の鍼灸がヨーロッパの医療界に直ちに大きなインパクトを与えることはなかった。

しかし彼らの報告がヨーロッパの科学のメインストリームに大きな驚きをもたらしたことは疑いない。それはライネの著作がイギリスの王立協会の手によって出版されたことや、ボイルの法則で有名な化学者ロバート・ボイルが中国医療に期待する記述を当時残していることなどからも推測できる¹。

この頃の来日ヨーロッパ人たちの経歴や業績は一人一人がユニークで人間らしいエピソードに富み、興味が尽きることがない。それらをここで紹介する余裕がないのが大変残念であるが、九州大学のヴォルフガング・ミヒェル教授が豊富な情報を啓蒙的に提供しておられるので参照されたい²。

ヨーロッパは鍼灸を受容

ヨーロッパの人々はアジアに興味を抱き続け、紆余曲折を経ながら18世紀になって鍼灸は徐々にヨーロッパに広まった。ドイツ人医師ローレンツ・ヒシュターは、外科学の基礎となった名著『外科』の中で鍼灸を推奨した。フランスの医師ルイ=ジョセフ・ベルリオーズ（作曲家ベルリオーズの父）は鍼

灸を積極的に治療に活用し、パリ医学校で鍼灸の実演を行ったという。フランス有数の病院であるホテル・デュ慈善病院において鍼灸教育が行われるほど鍼灸はフランス医療に浸透し、フランスはヨーロッパにおける鍼灸の中心地の観を呈した。

鍼灸はフランスからイギリスに伝わり医師の間に広まった。19世紀初めに出版された医学誌ランセットの第1版には、聴診器の使用を広めたことで知られるジョン・エリオットソンの鍼灸についての臨床論文があり、またリングル液を考案したシドニー・リンガーも鍼灸を治療に用いていたという。

こうしてヨーロッパでは、19世紀の末ごろまで鍼灸がリウマチ性の疼痛など様々な疾患の治療に大いに用いられた。しかし20世紀になって西洋医学が目覚ましい発展を始めると、その医学概念にうまく適合しない鍼灸は下火になり、やがて20世紀後半まで表舞台から姿を消すことになる。

ヨーロッパの鍼灸の特徴

このように、18世紀から20世紀にかけてヨーロッパに広まった鍼灸には、次にあげるようにいくつかの特徴があった。

まず、鍼灸に関心を持ち実践したのは医師たちであった。当時のヨーロッパの医師たちは積極的に新たな治療法を試し、報告した。医学の主流と目される医師たちも鍼灸を用いることが珍しくなかった。

次に、ヨーロッパ各国の中でも、当時とりわけ鍼灸に関心を示したのはフランスであった。フランスは19世紀からベトナムを支配していたため、ベトナムで行われていた鍼灸がフランスに伝わり、医療界が鍼灸を受け入れる下地を作ったのであった。

最後に、生薬療法は鍼灸ほどにはヨーロッパに受け入れられることはなかった。大黄、桂皮、人参などいくつかのアジア生薬がヨーロッパに伝わり人気を博したが、アジアの生薬療法の体系がヨーロッパで広く実践されるには至らなかった。

これらの特徴が現在の米国の鍼灸にも影響を及ぼすことになる。米国への鍼灸の伝播と現状については次回にご説明したい。

(続く)

参考

- 1) Harold J Cook: Medical Communication in the First Global Age – Willem ten Rhijne in Japan, 1674-1676. <http://www.ihp.sinica.edu.tw/~medicine/ashm/lectures/Cook-ft.pdf> September 28, 2004
- 2) 九州大学大学院 言語文化研究院 Prof. Wolfgang Michel-Zaitso http://www.rc.kyushu-u.ac.jp/~michel/index_jp.html September 28, 2004